

## ■大学院受験者インタビュー 2

### 国立(くにたち)音楽大学／音楽研究科／作曲専攻コンピュータ音楽コース 研究テーマ「デジタル音楽の作曲」

2010年10月インターカルト入学(レベル1)⇒2012年3月卒業(レベル6) 上海にある音大で作曲を専攻。大学在学中から、ゲーム、ウェブサイト、イベントの音楽などの作曲の仕事をしていた。1年目は東京芸大だけを受験したが、不合格。翌年は幅広く音大の情報を集め、各校の教授にも連絡を取って面談。2011年11月に国立(くにたち)音楽大学修士課程に合格。

#### ● 受験する大学や指導教授の探し方

中国にいる時には国立東京芸術大学(芸大)しか知らなかった。日本で一番いい音楽大学なのでそこに入りたいと考えていた。来日してから、知り合いの紹介で芸大音楽環境創造コースの教授に面談したが、ビジネス音楽をやりたいなら他の大学の方がいいと言われた。その年、芸大を受験したが、不合格だった。今考えてみると、この時は日本の音大について、大学院について、何も知らないまま受験した。2年目に入り、インターネットで全国の音大について情報を得た。また、連絡を取った音大の教授にも、作品の傾向に合う他の大学を紹介された。そうやって、受験する大学院を探した。2年目には東京、大阪、名古屋などの私大も7校ほどリストアップして検討した。受験科目、教授の作品、環境などが選択基準。専門科目の筆記試験は難しいので、できれば避けたかった。日本は音大の数が多く、学校のタイプもいろいろあるので、目的に合わせて自分に合う大学を探した方がいい。中国と違って、私立の音大の中にもいい大学がたくさんある。

#### ● 教授との連絡

メールを送ってから、電話で質問したり、会いに行ったりした。メールの書き方は進学相談の先生に聞いてテンプレートを作っておいた。大学院でやりたいことがそんなにはっきりしていなかったので、やりたいことを説明するというより、質問されることに素直に答えた。無理に先生の作品をほめたり、お世辞を言う必要はないと思う。自分の作品は、聞いてもらえるように準備して行った。自分の作品の中からその教授の専門や傾向に合う作品を選んで紹介することが必要。国立(くにたち)大学は教授から、「今年は国立(くにたち)の学部生の修士課程志望者が多いので大学の外から受験しても無理」と言われた。しかし、その教授は作品を認めてくれていて、受験してみたら合格することができた。

#### ● 試験の準備

西洋音楽史などの専門科目は、もともと勉強したこともなく、知識もない。試験のためにもほとんど勉強しなかった。中国ではこういう勉強はしないので、こういった科目があつて、その点数を重視する大学院に入るのは無理だと思う。面接試験のためには、クラスの先生や進学相談の先生と練習をした。

#### ● 提出作品

中国にいた時に作曲したものを提出した。音楽作品と、映像と音楽を組み合わせた作品など。技術の高さを重視する大学、芸術的なものを望む大学、商業音楽の専攻を持つ大学など、大学や教授の傾向に合わせて、提出する作品を選んだ。作品については、作った経緯、テーマ、特徴などを日本語で説明できるようにしておいた方がいい。

#### ● 後輩へのアドバイス

- ・来日したばかりの時には、まず日本語の勉強に集中する。
- ・早めに受験スケジュールを確認して自分で受験校のリストを作っておく。(出願、試験、発表など)
- ・過去の試験問題を入手して、傾向を見て受験するかどうか考える。
- ・中国と日本は音大の事情、受験事情が違う。中国は一部の名門音大とそれ以外の大学の差が大きいが、日本では私立大学や地方のあまり有名でない大学もレベルが高く、それぞれに個性がある。例えば、愛知県立芸術大学は県立で中国人には全く知られていないが、実際に大学に行って学生の演奏を聞いてみて、レベルが高く、学生も自分の演奏に誇りを持っていることに驚いた。この大学は環境も内容も良く一番入学したかったが、西洋音楽史の試験が難しく合格できなかった。岐阜県の情報科学芸術大学もプロの間で評価が高くレベルは高いが、日本人の中でも無名。このように、隠れた良い大学があるので、情報収集が大切。

## ■ 采访大学院升学者-2

### 国立音乐大学／音乐研究科／作曲专攻电脑音乐作曲 考入 研究主题「数码音乐作曲」

2010年10月进入草苑日本語学校(水准1) ⇒2012年3月毕业(水准6)

毕业于上海的音乐大学。大学在校期间开始从事游戏、网络、庆典音乐的制作工作。第一年只参加了东京艺大的考试，没有合格。第二年，扩大了选择范围，收集了各个音乐大学的信息，与各校的教授取得联系并进行了面谈。2011年11月收到了国立音乐大学（是私立大学的名称，不是国公立的国立）修士课程合格通知。

#### ● 查找大学和指导教授的方法

在中国时，只知道国立东京艺术大学。因为是日本最好的音乐大学，所以只想到考入东京艺大。来到日本后，通过友人的介绍与艺大的音乐环境创造课程的教授进行过面谈，但是教授说如果想做商务性音乐应该选择其他大学为好。当年参加了艺大的考试，没有合格。当时，对日本的艺大、大学院完全不了解的情况下参加了考试。进入第二年，通过网络收集了全日本的音乐大学的信息，跟教授取得联系。但是，教授还是给推荐了符合我作品倾向的别的大学。就这么一个一个地选择了大学院。在第二年总共筛选了东京、大阪、名古屋等地的7所大学。主要考虑了考试科目、教授的作品、环境等方面。专业科目的笔试比较难，所以想到了尽可能的避笔试。在日本，音乐大学数量多、种类也各式各样，最好是选择符合自己的大学。与中国不同，私立的音乐大学当中也有很多好的大学。

#### ● 与教授联系

发邮件、电话询问、跟教授会面。邮件的书写方式是通过大学院指导老师做好了模板。因为想在大学院研究的内容不是很明确，所以不是在说明自己想要做的内容，而是对教授所问的问题进行了实际的回答。没有必要盲目地赞扬教授的作品、说些恭维的话。准备好自己的作品，有必要在自己的作品中选择与教授的专攻、倾向相符合的作品进行介绍。国立音乐大学（是私立大学的名称，不是国公立的国立）的教授说过“今年想考入修士课程的学部生比较多，所以从本校以外参加考试也不可能合格”。但是，教授对于我的作品给予了认可，试着参加了考试，结果合格了。

#### ● 考试准备

西洋音乐史等专业科目，原先就没有学过，也没有这方面的知识。也没有为了考试而进行过学习。在中国不学习这方面的内容，所以有这些科目而且重视这些分数的大学院是无法考入的。面试之前，跟着班主任和升学指导老师进行过练习。

#### ● 提出作品

提出了在中国时创作的作品。音乐作品、影像和音乐相组合的作品等。重视技术含量的大学、期待艺术性的大学、具有商业音乐专攻的大学等，根据大学、教授的倾向来选择要提出的作品。对于作品，创作经过、主题、特征等要做好用日语进行说明的准备。

#### ● 给后辈的建议

- 刚来日本时，首选要集中在日本語学习上。
- 尽早确认考试日程，做好报考学校清单。（报名、考试、发表等）
- 取得过去考题，研究考试倾向，判断是否报考。
- 日本音大的情形、考试内容与中国不同。在中国，有名的音乐大学和其他大学的水准差距比较大。日本的私立大学和在地方的不是很出名的大学的水准也很高，并且各自有各自的个性特点。比如，爱知县立艺术大学，很多中国人不了解，但是实际去大学听了在校生的演奏，惊讶地发现水准很高，而且学生们对自己的演奏具有自豪感。非常喜欢这个大学的环境以及内容，但是因为西洋音乐史的考试很难最终未能考上。岐阜县的情报科学艺术大学，在专业人士当中评价很高水准也很高，但是日本人当中是无名的。像这些，有很多隐藏着的好的大学，所以收集信息是非常重要的。